

プリンセス 仏法悟得会 戒名



親・兄弟など、お葬式に直面した時、
とまどうことが多くあります。

その一つが「戒名」ではないでしょうか…

これは、多額なお金もかかりかなりやっかいな事です。

「先祖代々の菩薩寺をお持ちなら任職に預ければいい。

お坊様に知り合いがない方は、葬儀屋さん経由で、

お寺を紹介され、戒名をもらう」

のが一般的です。

でも戒名は自分で生前につけて

あの世に持つていくことができます。

この仏法悟得会では、

自分で自身の戒名を付ける。

また亡くなった家族、親族に

戒名をつけてあげる勉強会です。



第一章 「戒名」とは



戒名について、日本のいかなる法律にも、その定めは見当たらない。お釈迦様の生まれた国、インドではどうかというところ、ここにもない。では、お隣りの中国はどうなっているのか。ここにも、我が国の戒名に相当するものはない。中国には、「諡^{おひな}」または「諡^{いひな}」といって、生前に大変功績があった人に、朝廷からその人の死に際し贈られる制度が、かつて存在した。しかし、これとて、仏教との関係はもとより、宗教的意味は、無に等しい。もちろん、現代中国では、「諡」の制度はない。どうも、仏教本来の根本原理から離れ、お釈迦様の「教^{おしな}」とは関係なく、日本にのみ存在する、一種、宗教上（仏教上）の慣習と言っても差し支えないものようである。

戒名の戒は、仏教で言うところの、「戒律」の戒であり「戒律」とは、仏教徒たる者が、当然、守るべき「定め」のことである。この仏教徒が、守るべき戒律として、次の五つが、あげられている。

第二章 生前戒名 死後戒名



「戒名」は、各人が仏門に入った証拠として授けられる宗教上の名前であるとされている。すなわち、授戒の儀を経て、仏様の弟子になることと言ってよい。この授戒の儀、すなわち、「戒名」が与えられるのは当該本人が死亡した時というのが一般的だと考えられているが、本当はそうではない。第一章でも記したごとく、五戒を守ることを誓った人に授けられるわけであるから、死んだ後では遅すぎる。

本人が亡くなった折に、仏壇に「戒名」を書いた位牌を置く必要から、この時点で、一般には近くのお寺（檀那寺があれば、そのお寺）、または葬儀屋さんが斡旋してくれられたお寺に頼んで「戒名」を付けてもらうのが、一般的でごく普通のやり方である。お寺の方でも「生前戒名」を無理に勧めようとするのが実情。しかし、仏法の世界では、あくまで「生前戒名」が当たり前のことである。有名な戦国武将、上杉謙信の本名は上杉輝虎だが、謙信は「戒名」に他ならない。すなわち、生前に付けてもらった「戒名」の方が、本名よりも有名になったわけだ。

第三章 檀家制度 「戒名」の起源



江戸時代になって、幕府は鎖国政策の下にキリスト教を禁止し、この実を上げるために「寺請制度」を制定した。この制度により、住民は必ずどこかのお寺に所属することが義務付けられ、檀家制度、お寺は「宗門人別帳」を作り、各檀家の構成員を記載し、藩に届け出ることになった。すなわち、幕府→藩→寺→檀家のラインができたのである。この檀家制度よりきめの細かく行い必要から、日本全国各地に多数の寺院が造られることになった。各寺院の「寺領」は、幕府、大名から与えられることもあったが、基本的には、寺院（檀那寺）の傘下にある檀家、とりわけ有力な檀家による土地の寄附がその主たるものであった。

「葬式」「法要」「位牌」もこの頃から一般の農民達の間にも広まった。幕府からの命令でキリシタンに対する監視の責任を負わされることになったお寺は、檀家の子供の誕生、結婚、死亡、さらには、奉公人の出入りまでをもチェックすることとなった。言わばお寺が住民の戸籍をにぎることとなり、生きている人はもちろん、死人をも管理する必要から、死者に全員

第四章 「戒名」に価格差



葬儀の際支払う費用の中で「戒名料」の占めるウェイトが決して小さくないことは、葬儀を出した人なら誰でも承知していることである。この「戒名料」、高いものから安いものまで大きく差がある主な理由は、次の通りである。

- 一、信士、信女よりも、「院」居士、「院」大姉を望む遺族が多いこと。
- 二、先祖の「戒名」に院居士（大姉、まれには院大居士（清大姉）が付けられているので、「戒名」を付けるお寺のご住職が前例に倣って同様な「格式」の「戒名」を授与することになる。

- 三、宗派またはお寺により、「戒名」の格式により、価格が定められている。例えば、
院居士・院大姉……百万円、
院居士・院信女……三十万円～八十万円
居士・大姉……五十万円～八十万円
信士・信女……二十万円～五十万円

第五章

付いている「戒名」を改正



葬儀の際のドタバタの中で、「戒名」が葬儀屋さんやお坊さん任せになることは、決して少なくないどころか、故人はもちろん、遺族にも、何やらわからない「戒名」がインスタントに付けられるのが、ごく普通であろう。どんな「戒名」であろうと、気にしない人も大勢いるかもしれない。しかし、「戒名」を少しかじった人が、「どうも、親父の戒名はあまりにも簡単過ぎて気に入らない。見てくれも悪い」などと感じることは大いにあり得る。そこで、「戒名」を付けてくれた菩提寺の住職などとかけあつたりしても、拒否されるケースが多いと思われる。曰く、「戒名を変えてくれなどという話は聞いたことがない三等……」。

中には、「お宅の〇〇さんは、元来、ケチで戒名料を値切ったから、それ相応の戒名がついているのだ」などと言われかねない。

菩提寺や住職と非常に親しくしている場合ならともかく、葬儀の時だけインスタントに頼んだお寺の住職、または葬儀屋さん主導のもと、言わば勝手に付けられた「戒名」は、気に入らなければ気に入った、もっと威厳があり、後々、子孫が自慢できそうな「戒名」にど

第六章 各宗派の基礎



戒名を自ら付けるに際し、自分が属する宗派の概要を知っておくことは、決して損なことではあるまい。後程、各宗派の戒名の付け方の詳細を説明するが、各宗派の戒名のバックグラウンドとも言えるものであり、要素のみを記してみよう。

釈尊が三十五歳の時、ブツダガヤの菩提樹の大本の下で「悟り」を開いたのは、今から約二五〇〇年前のことである。この釈尊の教えを説いた経典の数は、約三千と伝えられているが、この膨大な数の経典がインドから中国へ伝えられた時、中国では、どの経典が本物なのか、より仏陀の教えを忠実に伝えているのかという点で意見が分かれ、それぞれ自分の信ずる経典こそ仏陀の教えに近いと主張したことから、いくつもの宗派が出来ることになった。

この状態は中国から朝鮮半島の高句麗、百済でも同じだった。西暦五三八年に、百済の王から日本に仏教の経典が献上され、これが我が国に仏教が伝えられた最初ということになっている。今から一五〇〇年前の話である。

奈良時代に入ると中国との交易がこれまでより盛んになり、中国から、「法相宗」、「三論

第七章 「戒名」を付ける



一 「戒名」の構成

「戒名」は、浄土真宗では「法名」、日蓮宗では「法号」と呼ぶ、その他の宗派は大体「戒名」と呼んでいると思つてよい。

この「戒名」の構成は次のようになっている。

第八章 お坊様が「戒名」付け



「戒名」付けのフロであるお坊様が「戒名」を付けるに際し、どんな点に注意をしているのか、ちよつとのぞいてみよう。

仏教に関する本は、各宗派別のものも含め、その気になって探せば結構あるにはある。しかし、「戒名」について書かれている本は少ない。まして、「戒名の付け方」についての本はさらに少ないが、「戒名」を付ける際にいろいろ苦勞されていることが散見されるものがある。その中から読者のご参考になりそうなことを取り出してまとめてみた。

(一)、「戒名」に俗名を一字(こくまれには二字)入れることがごく普通に行われる昨今であるが、必ず入れなければいけないというものではない。また、俗名がカタカナであったり、漢字でも戒名に不適当と思われる字、例えば「花子」さんの「花」は、ついつい「戒名」に入れたくなるが、この「花」という字は、賭博の「花札」を意味する場合があるので避けた方がよい。また、俗名を「戒名」に入れた場合、その字は必

第九章 実習 「戒名」を付けてみよう



(一) では、「日野真佐夫(仮名、男性)氏の戒名」。

- ①住所…愛媛県新居浜市
 - ②年齢…六十一歳
 - ③趣味…山歩き、溪流釣り、ゴルフ、音楽鑑賞、読書
 - ④職業…中堅商社に三十八年間勤務し、主に営業畑を歩み、昨年六十歳で退職
 - ⑤人生観…家庭でも、職場でも、近所や友人達との付き合いにおいても仲良く友好的にをモットーにして生きてきた。これからも平和に暮らしていきたい。
 - ⑥最も好きな字を書いてもらったところ、「誠心誠意」ということであった。
 - ⑦宗派…三男坊のため特定の宗派と決めてはいないが、実家を継いだ長兄は「真言宗」ということなので、真言宗の「院、居士付の九字戒名」を考えてみたい。
- これまでの説明でおわかりのように、真言宗の九字戒名は「天台宗」「浄土宗」「臨済宗」

第十章 各宗派のお経 「戒名」に使用可能な漢字



お経は『阿弥陀経』『観音経』のように、各宗派にわたり広く読まれているお経と『正信偈』のように、浄土真宗のみで読まれているものがある。いずれにせよお経の言葉は、これから読者の皆さんが自らの「戒名」を付けられる際に、採り入れたい「漢字」が数多く含まれているのでぜひ参考にしていただきたい。

仏教の聖典のことを「お経」という。このお経には「大乘仏教のお経」と「小乗仏教のお経」があるが、中学校の頃、歴史の教科書で習ったように、小乗仏教は戒律が極めて厳しく排他的であり、主として出家者を対象としている。お釈迦様が説かれた教えは、この小乗仏教に近いとされているが、お釈迦様が亡くなられて約五百年後、大乘仏教が興り、小乗仏教に比べ、より在家信者にわかりやすく釈尊の教えを説いた。このためその後、大乘仏教が広く一般に受け入れられることとなり、今日に至っている。

従って、現在、日本において各宗派がそのより所としている経典は、みな大乘仏教の流れ